

Index

副所長就任のご挨拶	1	平成30年度科学研究費助成事業の採択状況	6
研究チーム紹介	2	外部資金とは	7
ホームページリニューアル	4	理事長研究奨励費採択者	7
科学技術週間参加行事レポート	5	老年学・老年医学公開講座開催予定	8
TOBIRA研究交流フォーラムの報告	5	主なマスコミ報道／編集後記	8



科学技術週間参加行事 (P.5)

副所長就任のご挨拶

自然科学系副所長 重本 和宏

本年度4月から自然科学系副所長に就任しました重本和宏です。私が自然科学系の研究部長として研究所に赴任してから約10年過ぎたところですが、実は30年程前、大学院修了後に研究員として約3年半在籍していたことがあります。異動後も人的交流は続いていましたので、研究所の事は私の心の中にいつもありました。これから大役を担うという責任を強く感じています。

老化研究を取り巻く環境は、30年前と比べて大きく変化しています。わが国は世界に先駆けて超高齢社会を迎え、今後も人口に占める高齢者の割合が増加します。老化研究を目的とする研究所に対して、都民の皆様はより良い老後を迎えることができる画期的な研究成果を待っておられると思います。自然科学の研究の進め方もこの30年間で大きく変化しています。私が研究所に着任した時、最初に行った実験は遺伝子組換え実験でした。当時はDNAやmRNAの核酸配列を決めるのも時間がかかり、分子レベルで老化の機構を解明するにはまだ困難な時代でした。今は、個人のゲノム情報は簡単に入手でき、さらに種々の細胞や動物モデルを対象に様々なテクノロジーを駆使した解析

により、体系的で領域横断的な研究情報を入手して解析することが可能になりました。この5年間をみても、老化の機構に関わる画期的な研究成果の論文発表が年々増加しているように思います。



今年度は、これまでの研究成果を踏まえ第三期中期計画の初年度になります。第三期ではサルコペニア・フレイルや認知症などの老年症候群を克服するために病態の解明、予防・早期発見・治療法の開発を進め、成果を社会へ還元することを目標としています。高齢者医療・介護を支えることができるイノベーションを創出するために、自然科学部門の研究員が社会科学部門や病院などの異種分野と学際的な連携を深め、より一層研究がやりやすい環境となるよう精一杯努力したいと思っています。

研究チーム紹介 老化機構研究チーム

チームリーダー 伊藤 雅史

老化機構研究チームでは、分子機構グループは糖鎖、プロテオームグループはタンパク質、細胞機能グループは細胞間情報伝達に着目し、老化および老化関連疾患のメカニズムの解明およびバイオマーカーの同定を目指しています。

老化機構研究チームホームページ：

<http://www.tmg Hig.jp/research/team/roukakikou/>

分子機構研究

私たちの研究室では、老化と老化に伴う疾患のメカニズムについて「糖鎖」の働きに着目して研究しています。「糖鎖」とは、その名の通り、糖がつながった鎖のことで、タンパク質や脂質に結合してそれらの性質や働きを決めている重要な分子です。糖鎖を持つタンパク質や脂質の多くは細胞の表面に存在し、ホルモンや細菌などの認識や細胞同士の情報交換の際にアンテナとして働き、細胞の機能をコントロールすることで、免疫やガンなど様々な生命現象に関わっています。「糖鎖」は加齢や栄養など多様な要因によって変化します。こうした変化はタンパク質や脂質の働きに影響するため、細胞の機能を適切にコントロールすることができなくなると、様々な疾患の原因になることが分かってきました。

私たちの研究からも、アルツハイマー病の原因物質と考えられているアミロイド β の産生に関わる糖鎖や筋肉の維持に必要な糖鎖の発見など、糖鎖に関する新たな知見が得られています。私たちは、認知症などの老化に関わる疾患における糖鎖の変化から疾患のメカニズムを解明し、予防・治療法の開発に応用することを目指しています。

分子機構研究ホームページ：

<http://www.tmg Hig.jp/research/team/roukakikou/bunshikikou/>

プロテオーム研究

プロテオーム (proteome) とは、「タンパク質 (protein)」と「“全体” を意味する -ome」から作られた言葉です。その名の通り、私たちの研究室では組織や血液に含まれるタンパク質の全体を研究対象とし、質量分析システムなど最新の分析技術を用いた解析を行っています。生命現象の担い手であるタンパク質を調べることによって、老化や老化関連疾患で重要な役割を果たすタンパク質を明らかにし、そのメカニズムを解明したり、バイオマーカーの開発につなげたりすることを目的としています。

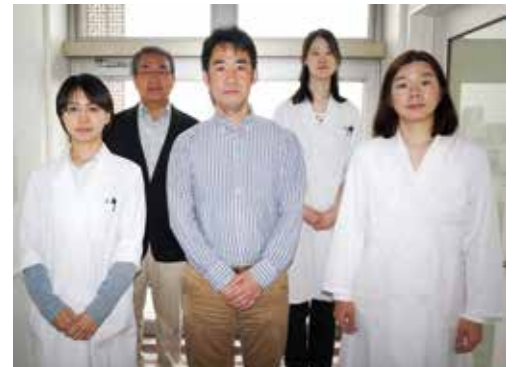
健康長寿の秘訣を探るために、ヒトの健康長寿モデルである超百寿者 (105 歳以上) の血液中のタンパク質を調べています。特に、タンパク質の糖鎖修飾に注目し、健康長寿を達成した人に特徴的な糖鎖修飾を明らかにしました。また、老化関連疾患に関する研究では、糖尿病性腎症や糖尿病性認知症といった糖尿病合併症に関わるタンパク質を調べています。さらに、今までのプロテオーム解析法ではわからないことも多くあるので、新たな知見を得るための分析技術の開発にも取り組んでいます。

第3期中期計画において、これらの研究から新たな治療法、創薬シーズ、バイオマーカーシーズ、健康管理システムなどを提案することを目指します。

プロテオーム研究ホームページ：

<http://www.tmg Hig.jp/research/team/roukakikou/proteome/>

チームリーダー 萬谷 博



前列中央がチームリーダー

チームリーダー 三浦 ゆり



後列中央がチームリーダー

細胞機能研究

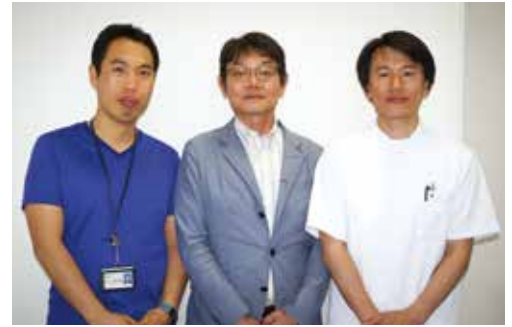
私たちの研究室では、細胞・臓器間情報伝達の観点から老化および老化関連疾患の分子メカニズムの解明とバイオマーカーの同定を目指しています。細胞から分泌されたエクソソームなどの細胞外小胞は、血液や尿などの体液中に存在しており、そこに含まれているタンパク質・核酸を調べることで疾患の診断ができる可能性が期待されています。また、細胞外小胞は標的の細胞に作用して情報を伝達することにより、生理的にも病理的にも重要な役割を担っているものと考えられています。私たちがもうひとつ注目しているのが慢性炎症です。慢性炎症は老化および老化関連疾患のみならず生活習慣病など様々な疾患の発症・進行に関与していることが知られています。近年では腸脳相関などの臓器間相互作用と慢性炎症との関連も注目されています。

私たちは、疾患のモデル細胞やモデル動物と患者および高齢者のヒト検体を用いて研究を行っています。細胞外小胞の研究では、主にがん・認知症を対象として疾患特異的なバイオマーカーの同定とその検出システムの構築を目指しています。慢性炎症の研究では、末梢での炎症が脳に及ぼす影響とそのメカニズムの解明および慢性炎症に関連する新規因子の同定を目指しています。

細胞機能研究テーマホームページ：

<http://www.tmg Hig.jp/research/team/roukakikou/saiboukinou/>

テーマリーダー 伊藤 雅史



中央がチーム及びテーマリーダー

研究チーム紹介 社会参加と地域保健研究チーム

チームリーダー 藤原 佳典

高齢者人口の大多数を占める自立高齢者を対象に、多世代共生社会に向けたプロダクティブエイジングの促進と健康余命の延伸・フレイル予防対策に関する研究を推進します。

社会参加と地域保健研究チームホームページ：

<http://www.tmg Hig.jp/research/team/shakaisanka-chiikihoken/>

社会参加と社会貢献研究

テーマリーダー 藤原 佳典

当テーマは基本ビジョン「高齢者が導く持続可能な多世代共生社会の実現」に向けて、第三期中期計画においては、3つの目標【1】多様な社会参加の機会の増加、【2】社会参加による健康維持・増進、【3】世代間の相互理解・互助の促進を設定しました。これら3つの目標を達成するために、まず(A)社会参加が高齢者に与える健康影響について、各種調査や実験の両面から検討し、その背景にある心身社会的メカニズムについて明らかにします。また、(B)プロダクティブエイジング(=年齢に関係なく、なんらかの形で家庭や社会において役割をもつ生き方)の実現に資する各種プログラム・システム開発として、(a)就労支援研究は、高齢者や雇用者等への調査を通して高齢者と社会にとって望ましい「働き方」とその支援策を提示します。(b)ボランティア・生涯学習研究は、絵本読み聞かせプログラムの進展および多様な新規プログラムの開発・応用を通して、生涯学習を導入とする健康維持・増進プログラム、さらには社会貢献へと進展するプログラムを開発します。(c)多世代交流研究は世代間の交流と助け合いの仕組みづくりを目指して全国の好事例と要件を調べ、多世代共生型の地域包括ケアシステムを推進するための方策を提示します。

社会参加と社会貢献研究テーマホームページ：

<http://www.tmg Hig.jp/research/team/shakaisanka-chiikihoken/shakaisanka-shakaikouken/>



後列中央がチーム及びテーマリーダー

ヘルシー・エイジングと地域保健研究

テーマリーダー 北村 明彦

「高齢になっても、尊厳を保ち、地域で安らかに自律した生活をおくれますように」、そうした願いを込めて、私どもは、世界保健機構が提唱した“A public-health framework for Healthy Ageing（健康な高齢化のための公衆衛生の枠組み）”の概念のもとで、ヘルシー・エイジング（身体的、精神的及び社会的な機能を保ちながら自律した生活を送ること）の実現のための研究を、地域におけるフレイル予防の観点から進めています。そのためには、①身体的・精神的な心身機能の維持、②心身機能が減退しつつある場合でも生活する機能を維持するためのセルフケア、生活習慣、医療・保健・介護予防サービス、生活環境の整備が必要です。特に「習慣的な運動実践」、「たんぱく質をはじめとした多様な栄養摂取」、「活発な外出・社会参加」の3つを地域ぐるみで推進していくことが重要と考え、その基盤となる地域システムを、東京都大田区、埼玉県鳩山町・加須市、群馬県草津町・中之条町、兵庫県養父市などで構築中です。東京をはじめ各地の地域包括ケアシステムへの応用、心身機能維持のための機器やアプリ、モノのインターネット（IoT）などのツール開発が見込まれます。部長、専門副部長、常勤研究員、非常勤研究員、事務補助員等、約20名の体制でチャレンジしています！



前列中央がテーマリーダー

ヘルシーエイジングと地域保健研究テーマホームページ

<http://www.tmghig.jp/research/team/shakaisanka-chiikihoken/healthy-aging/>

大都市高齢者基盤研究

テーマリーダー 小林 江里香

本テーマは、地域住民の大規模調査データの収集や分析を行い、東京などの大都市居住の高齢者が、家族を含む社会とのつながりの中で抱える課題を、多面的かつ客観的に検討することで、社会の変化に即した政策提言を行うことを目指しています。今年度新設されたばかりで、常勤研究員2名の小さな所帯ですが、他テーマとも連携しながら研究を進めています。



左手前がテーマリーダー

具体的な研究課題としては、1) 高齢期のワーク・ライフ・バランス推進のための課題の明確化、2) 世代間支援の実態と効果の解明の2つがあります。課題1)では、高齢者の就労参加（雇用延長や再就職）が地域活動への参加に与える影響について検証し、就労と地域活動を両立するために必要な方策を検討します。また、高齢期にはどのような活動にどの程度参加するのが健康維持や幸福感の向上にとって良いのかを、就労だけでなく、地域・家庭内活動とのバランスも考慮しながら明らかにします。課題2)については、親族内・親族外（主に地域）における高齢者と次世代との関係についての基礎的なデータを蓄積し、世代間関係の実態を明らかにするとともに、高齢者の次世代への支援提供が、高齢者自身や地域社会にもたらす効果を検証します。

具体的な研究課題としては、1) 高齢期のワーク・ライフ・バランス推進のための課題の明確化、2) 世代間支援の実態と効果の解明の2つがあります。課題1)では、高齢者の就労参加（雇用延長や再就職）が地域活動への参加に与える影響について検証し、就労と地域活動を両立するために必要な方策を検討します。また、高齢期にはどのような活動にどの程度参加するのが健康維持や幸福感の向上にとって良いのかを、就労だけでなく、地域・家庭内活動とのバランスも考慮しながら明らかにします。課題2)については、親族内・親族外（主に地域）における高齢者と次世代との関係についての基礎的なデータを蓄積し、世代間関係の実態を明らかにするとともに、高齢者の次世代への支援提供が、高齢者自身や地域社会にもたらす効果を検証します。

大都市高齢者基盤研究テーマホームページ：

<http://www.tmghig.jp/research/team/shakaisanka-chiikihoken/daitoshikoureishakiban/>

研究所ホームページをリニューアルしました！

3月30日（金）に当センターホームページをリニューアルしました。ぜひご覧ください。

URL <http://www.tmghig.jp/research/>

「東京都健康長寿医療センター研究所」で検索！！

東京都健康長寿医療センター研究所

検索

をクリック！

科学技術週間参加行事レポート

老化脳神経科学研究チーム 研究員 内田 さえ

4月17日(火)に板橋区立文化会館にて、当研究所の科学技術週間参加行事が行われました。肌寒い気候にもかかわらず330名の方々にご参加いただきました。重本副所長の司会のもと、許センター長の挨拶より昭和35年に制定された科学技術週間の主旨、当センター研究所の取り組みが紹介されました。ユーモア溢れるセンター長のお話^{お話し}に会場はすぐに和やかな雰囲気^{きゆうき}に包まれました。続いて「なぜ認知症になると『におい』が分からなくなるの?」と題して私が講演を務めました(表紙写真)。認知症、とくにアルツハイマー病での脳^{きゅうかく}の病態と嗅覚の関係について、最近の研究内容を含めて紹介しました。講演の前後には、9つの研究チームの研究員がポスター形式で研究紹介を行いました(右写真)。ご参加いただいた方々には講演とポスター発表の説明を熱心に聴き入ってくださり、多くの示唆に富んだ質問をくださいましたことに感謝いたします。



質疑応答

科学技術週間参加行事当日には、たくさんのご質問をいただきました。質疑応答にて回答しました一部をご紹介します。

Q 風邪でにおいがわからなくなると、認知症になってしまうことはありますか？

A 風邪の場合は、風邪が治れば嗅覚は戻りますが、慢性疾患の蓄膿症や何らかの原因でにおいが嗅ぎにくくなっている方は、耳鼻科で専門の先生に診てもらい、きちんとにおいを嗅げるようにした方が、認知症の予防になると思います。脳を活性化させるツールの一つとして嗅覚は大切ですので、治療で治せるのであれば、治した方が良いでしょう。

Q どのようににおいを嗅げば、嗅覚のトレーニングになりますか？

A どのにおいが最も良いかということは、これから明らかにされていくことになると思いますが、意識してにおいを嗅ぐと、においを感知する嗅上皮をたくさん刺激することになります。そうするとにおいに対する意識を高め、大脳新皮質のアセチルコリンがたくさん出るようになります。嗅覚のトレーニングとして日常生活で意識して嗅ぐことをしていただくと良いでしょう。

Q 認知症の発症率はなぜ女性に多いのでしょうか。

A 女性の方が長寿であることが要因の一つですが、その他には性ホルモンや遺伝子などの影響も考えられています。女性はもともと女性ホルモンの一つであるエストロゲンが高く、エストロゲンは脳のアセチルコリン神経を活性化させる作用があります。その作用が更年期以降に減ることで、認知症を発症しやすくなるのではないかと考えられています。もう一つは遺伝的な因子で、エストロゲンの受容体の遺伝子の個人差が、アルツハイマーの発症の危険性を高めることが報告されています。

第7回 TOBIRA 研究交流フォーラムの報告

事業支援係 井出 ひろ美

5月11日(金)、経産省大臣認可の非営利公益法人「東京バイオマーカー・イノベーション技術研究組合(略称: TOBIRA)」が主催する第7回研究交流フォーラムが、御茶ノ水のソラシティカンファレンスセンターで開催されました。今回のフォーラムでは、新開省二副所長が「社会科学系研究の概要と共同研究の可能性ービッグデータ、生体試料、ICT、AIを用いた研究開発ー」と題した講演を行いました。また、ポスター展示においては、自然科学系の研究員等から多数の演題発表があり、活発なディスカッションが行われました。ブース展示においては、センターの研究成果や保有特許の紹介等を行い、大学等の研究機関や民間企業との交流を図りました。

今後もこのような研究交流フォーラム等への参加を通じて、センターの研究内容や研究成果を広く多方面に情報発信するとともに、外部機関とのネットワークを構築し、共同研究・受託研究等の産学公連携活動の推進や研究成果の実用化に繋げていきたいと思ひます。

平成30年度 科学研究費助成事業（科学研究費補助金及び学術研究助成基金助成金）の採択状況
（学術研究助成基金助成金の継続課題を含む）

所属研究チーム	氏名	研究種目	新規	研究課題
所長代理	遠藤 玉夫	基盤研究 (C)		O-マンノース型糖鎖生成経路の解明
自然科学系副所長	重本 和宏	基盤研究 (B)		骨格筋の代謝変換の機構に基づくサルコペニアの病態解明
社会科学系副所長	新開 省二	基盤研究 (A)		全国高齢者代表標本におけるフレイルの出現率と心理・社会・経済的資源による格差
老化機構	伊藤 雅史	基盤研究 (B)		エクソソームによる前立腺がんの質的診断システムの開発
	伊藤 雅史	挑戦的萌芽研究		Mitochondrial particle を介した細胞間クロストークの解明
	萬谷 博	基盤研究 (B)		O-マンノース型糖鎖の構造多様性とその決定機構の解明
	三浦 ゆり	基盤研究 (C)		健康長寿の指標となる糖鎖構造とその生物学的意義の解明
	今江 理恵子	若手研究 (B)		ホスファチジルイノシトール特徴的脂肪酸組成の生物学的意義の解明
	津元 裕樹	基盤研究 (C)		2段階クリック反応を利用した新規 O-GlcNAc 化プロテオーム解析法の開発と応用
	岩本 真知子	挑戦的萌芽研究		糖尿病合併症としての認知症に関する診断指標の開発と予防戦略への発展
	藤田 泰典	基盤研究 (C)		腸内細菌由来 OMV の生理・病理的役割の解明
川上 恭司郎	基盤研究 (C)		神経炎症におけるエクソソーム上ヒストンの役割の解明	
老化制御	大澤 郁朗	基盤研究 (B)		分子状水素による抗炎症メカニズムの解明とその臨床応用のための基盤研究
	東 浩太郎	基盤研究 (C)		乳癌悪性化を担う TRIM ファミリー蛋白質の作用メカニズムと臨床応用
	高山 賢一	基盤研究 (B)		前立腺癌のホルモン療法抵抗性獲得に至るエピゲノム調節機構の統合的解明と臨床応用
	近藤 嘉高	若手研究 (B)		ビタミン C、E の同時不足がエストロゲン欠乏マウスの皮膚に及ぼす影響
	池谷 真澄	基盤研究 (C)	☆	膜脂質をメディエーターとする水素分子の酸化ストレス応答機構解明
老化脳神経科学	遠藤 昌吾	基盤研究 (B)		抗酸化物質が運動記憶へ及ぼす影響の解析とその分子機構の解明
	堀田 晴美	基盤研究 (C)		嚥下に伴う甲状腺からのホルモン分泌促進メカニズムの解明とフレイル予防への応用
	三浦 正巳	基盤研究 (C)		尾側線条体の新規機能領域と扁桃体入力の生理的意義 - 安全信号学習と恐怖条件付け
	渡邊 信博	基盤研究 (C)		疼痛性循環反応の可塑的变化に関する神経性機序の解明
	柳井 修一	基盤研究 (C)	☆	ドラッグ・リポジショニングによるアルツハイマー型認知症新規治療薬の基礎研究
	井上 律子	若手研究 (B)		常同行動の神経基盤 - 線条体局所神経回路の生理的役割
	遠田 明子	若手研究	☆	関節不動化による MMP13 の発現変化と骨リモデリングに向けた治療法の開発
	中内 さくら	基盤研究 (C)	☆	線条体微小梗塞後の運動機能回復機序の解明
	飯村 佳織	若手研究	☆	排尿の促進に効果的な皮膚刺激方法の確立；低活動膀胱に有用なセルフケア開発に向けて
老年病態	佐々木紀彦	基盤研究 (C)		血管疾患に対する GM1 を標的とした新たな予防・治療法開発に向けた基盤研究
	板倉 陽子	若手研究 (B)		健康長寿を目指す高齢者心疾患における治療および予防のための糖鎖関連老化因子の解明
	上住 円	基盤研究 (C)		Pro-IGF- II シグナルを利用した安全性の高い老化筋再生促進治療法の開発
	森 秀一	基盤研究 (C)		神経筋シナプスを標的としたサルコペニアのバイオマーカー確立に向けた研究
	本橋 紀夫	基盤研究 (C)	☆	加齢性筋萎縮のメカニズム解明及び予防・治療法開発
	時村 文秋 (協力研究員)	基盤研究 (C)		整形外科領域における手術部位感染予防に関する多施設共同研究
老年病理学	石渡 俊行	基盤研究 (C)		新たな腫瘍分子標的的 FGFR-4 に対する個別化治療の研究
	相田 順子	基盤研究 (C)		5 年以上追跡されたバレット食道例のテロメア長とバレット癌の発生予測
	新井 富生 (協力研究員)	基盤研究 (C)		高齢者胃癌の病理学的特徴とその発生に関連する遺伝子変化の解析
	仙石 鎌平 (協力研究員)	基盤研究 (C)		Lewy 小体病 (パーキンソン病) の病理学的アプローチによるバイオマーカーの確立
	西村 誠 (協力研究員)	基盤研究 (C)		超音波内視鏡下穿刺吸引細胞診による膵腫瘍と膵嚢胞におけるエクソソームの解析
	松田 陽子 (協力研究員)	基盤研究 (C) 特設		幹細胞における老化機序解明と組織再生へ向けた試み
	種井 善一 (協力研究員)	若手研究 (B)		細胞接着分子 CADM1 による肺高悪性度神経内分泌癌の悪性化機序
神経画像	石井 賢二	基盤研究 (C)		異なるタウイメージングトレーサーの同一被験者における直接比較と画像病理検証
	豊原 潤	基盤研究 (C)	☆	PET による DNA 合成イメージングに基づいた神経新生評価法の確立
	坂田 宗之	基盤研究 (C)	☆	FDG-PET と機械学習を用いて非典型例や亜種に着目した認知症自動鑑別診断
	多胡 哲郎	若手研究	☆	脳内ユビキチン陽性病変のイメージングを目的とした PET 用 HDAC6 プローブの開発
	石橋 賢士	若手研究 (B)		新規 mGluR1 リガンド ITMM の脊髄小脳変性症における診断薬としての有用性
	徳丸 阿耶 (協力研究員)	基盤研究 (C)		画像統計解析と剖検所見に基づく認知症の鑑別診断
	亀山 征史 (協力研究員)	基盤研究 (C)	☆	リファンピシンによる認知症の予防効果
社会参加と地域保健	藤原 佳典	基盤研究 (A)		大都市求職高齢者の実態解明およびシームレスな社会参加支援に向けた研究
	北村 明彦	基盤研究 (B)		高齢者の健康余命に及ぼすフレイルと生活習慣病の中長期的影響の解明
	小林 江里香	基盤研究 (B)		高齢期における就労、地域、家庭内活動のバランスとコンフリクト
	鈴木 宏幸	基盤研究 (B)		高齢期の認知機能低下を適切に評価するための心理検査開発に係る包括的研究
	野中 久美子	基盤研究 (B)	☆	都市部高齢者に適した住民主体の生活支援サービス提供モデルの検討
	桜井 良太	若手研究 (A)		高齢者における歩行機能低下と認知機能低下の因果関係の解明
	清野 諭	若手研究 (B)		サルコペニア予防に向けた通信型運動・栄養支援プログラムの開発
	横山 友里	若手研究	☆	改良版食品摂取の多様性得点の開発と妥当性および有用性の検討
	倉岡 正高	基盤研究 (B)	☆	多世代型居場所・交流プログラムの優良事例の検証と研修プログラムの開発
	谷口 優	若手研究	☆	Frailty の加齢変化パターンの類型化及び医療費・介護費との関連
自立促進と精神保健	金 憲経	基盤研究 (B)		フレイル重層化の早期予防を目的とした多面的支援システムの構築と効果検証
	渡邊 裕	基盤研究 (C)		ミラーニューロンシステムによる認知症食行動関連障害改善法の確立

所属研究チーム	氏名	研究種目	新規	研究課題
自立促進と精神保健	大須賀洋祐	若手研究 (B)		高齢期における認知機能の低下を予測する新たなパフォーマンステストの開発
	本川 佳子	若手研究	☆	地域在住高齢者のフレイル予防を目的とした栄養障害早期発見アセスメントツールの開発
	宇良 千秋	挑戦的萌芽研究		認知症の人の包括的 QOL に対する稲作ケアの効果
	枝広 あや子	若手研究 (B)		認知症の摂食嚥下障害の多様性に配慮した経口摂取支援の検討
	小川 まどか	若手研究 (B)		高齢者が暮らす居宅の温熱環境が血圧・認知機能に及ぼす影響に関するフィールド研究
	杉山 美香	基盤研究 (C)	☆	地域に暮らす認知症高齢者の日常生活支援ニーズの可視化と背景要因の検討
	多賀 努	基盤研究 (C)	☆	行動分析学理論を援用した介護保険サービス事業所の離職率ゼロの実現方策に関する研究
	平野 浩彦 (協力研究員)	基盤研究 (C)		アルツハイマー病およびレビー小体型認知症の摂食嚥下障害への対応に関する調査研究
福祉と生活ケア	島田 千穂	基盤研究 (C)		認知症高齢者の生活と医療の選択を支える終末期の段階的事前準備の方法の開発
	河合 恒	基盤研究 (C)		スタチン誘発性ミオパシーの初期症状は高齢期の生活機能低下に影響するか
	森 寛子	基盤研究 (C)		摂食・嚥下リハビリテーションの経口摂取改善要因と介護者の心理的支援に関する研究
	涌井 智子	基盤研究 (B) 特設		地域循環型家族介護支援システムの構築に関する研究
	涌井 智子	若手研究 (A)		社会保障システムの継続性に資する家族・保険制度・地域社会の相互関係に関する研究
	光武 誠吾	若手研究	☆	医療・介護ビッグデータを用いた再入院の実態把握とわが国の再入院予防策への提案
	平山 亮	若手研究 (B)		非正規雇用の成人子における介護離職リスクの分析：「介護レディネス」に着目して
中里 和弘	若手研究 (B)		在宅における終末期ケアとの連続性から捉えたグループケア	
実験動物施設	野田 義博	基盤研究 (C)		酸化ストレスによって障害を受けた精子機能に対する分子状水素の改善効果

※ ☆：新規採択者
 ※ 当センターにて応募・内定を得た研究者だけでなく、現在所属している研究者も対象。

外部資金とは

研究を行っていくには、実験用の試薬・器具等の購入、研究員・技術員の雇用費用、出張費用など様々な経費がかかります。こうしたお金は、研究機関から各研究員に支出される研究費（運営交付金、内部研究費）だけでは十分ではありません。そこで研究機関以外から獲得する必要があり、これを外部資金と言います。主な外部資金には、文部科学省や日本医療研究開発機構（AMED）など公的機関からの研究助成金、民間の財団等からの研究助成金、国や公的機関からの委託を受ける委託研究費、企業や自治体等との受託・共同研究費などがあります。これらの多くは、研究者が独自の発想に基づく研究提案をしたうえで、学術的に評価されて採択されるため、競争的研究資金と呼ばれています。

科学研究費助成事業（科学研究費補助金／学術研究助成基金助成金）：科研費

文部科学省もしくは日本学術振興会によって交付される科研費は、人文学、社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」（研究者の自由な発想に基づく研究）を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」であり、専門分野ごとに、研究者による審査を経て、独創的・先駆的な研究に対する助成を行うものです。

この科研費は、競争的資金の中で最も多くの研究者が受け取っている研究費で、研究人数や交付される研究費などの規模により幾つかの申請区分があり、研究期間は2～5年となります。毎年秋に次年度の新規募集があり、4～7月にかけて採択が決定されます。ここ最近の採択率は25%前後です。今回は昨年度までに採択された継続課題と4月に採択が決定した（表の☆）基盤研究（A, B, C）と若手研究の、代表研究者と研究課題について掲載しています。

平成30年度 理事長研究奨励費 採択者一覧

所属	氏名	研究課題名
老化機構研究チーム プロテオーム	梅澤啓太郎	タンパク質の多硫化修飾に着目した新規翻訳後修飾オミクス解析法の開発
神経画像研究チーム PET 画像診断研究	石橋賢士	錐体路ワラー変性イメージングを用いた、脳卒中における運動障害の機能評価と予後予測の試み
自立促進と精神保健研究チーム フレイルと筋骨格系の健康研究	大須賀洋祐	転倒予測指標としての Stepping Trail Making Test の開発
福祉と生活ケア研究チーム 医療・介護システム	増井幸恵	マインドフルネストレーニングは老年的超越を高めるか？：RCT による検証



前列が理事長と採択者

老年学・老年医学公開講座 開催予定

第151回老年学・老年医学公開講座

『ご存知ですか？「健康長寿新ガイドライン」』

ポイントを押さえて！あなたも健康長寿！

1. 『食生活～いろいろ食べて、やせと栄養不足を防ごう！～』
社会参加と地域保健研究チーム 研究員 横山 友里
2. 『体力・身体活動
～筋力+歩行力で、生活体力をキープしよう！～』
社会参加と地域保健研究チーム 研究員 清野 諭
3. 『社会参加～外出・交流・活動で、人やまちとつながろう！～』
社会参加と地域保健研究チーム 研究員 野中 久美子

日 時：平成30年9月6日(木) 13:15 から16:10まで
場 所：文京シビックホール大ホール (定員 1,800 名)
東京都文京区春日 1-16-21
東京メトロ丸の内線・南北線後楽園駅(5番出口直結)
都営地下鉄三田線・大江戸線春日駅(文京シビック
センター前)
(文京シビックセンター連絡通路直結)
JR中央・総武線水道橋駅(徒歩約10分)

主なマスコミ報道

H29.12~H30.5

副所長

新開 省二

- 「健康寿命 UP 術」
(産経新聞社「夕刊フジ」H30.3.14、H30.3.21、H30.3.28)
- 「新しい健康長寿の道しるべ」
(サントリーウェルネス通信「美感遊創」H30.4.1)
- 「親の健康で子供が注意すべき点について」
(保健同人社「笑顔」H30.4.10)

老化脳神経科学研究チーム

研究部長 堀田 晴美

- 「過活動膀胱の対策について」
(わかさ出版「夢 21」H29.12.29)

老年病理学研究チーム

専門副部長 相田 順子

- 「がんとテロメアの関係」
(日刊現代「日刊ゲンダイ」H30.4.3)
- 「テロメア・アンチエイジング術」
(日経BP社「日経ヘルス」H30.4.2)

社会参加と地域保健研究チーム

研究部長 藤原 佳典

- 「いつまでも輝く人 好奇心を忘れずに」
(厚木市「広報あつぎ」H30.5.1)

社会参加と地域保健研究チーム

研究部長 北村 明彦

- 「メタボとフレイルの影響」
(朝日新聞出版「週刊朝日」H30.2.9)

社会参加と地域保健研究チーム

研究員 谷口 優

- 「生活の中で習慣にしたいこと」
(テレビ東京「主治医が見つかる診療所」H30.1.11)

社会参加と地域保健研究チーム

非常勤研究員 飯塚あい

- 「『将棋』と『囲碁』子供にやらせるならどっち？」
(新潮社「週刊新潮」H30.2.22、H30.3.1)
- 「囲碁で認知症ケアを」
(日本棋院「週刊碁」H30.4.2)
- 「囲碁で『認知症予防効果』発表」
(日刊スポーツ「日刊スポーツ」H30.4.16)

自立促進と精神保健研究チーム

研究部長 栗田 圭一

- 「認知症本人ガイド発行」
(共同通信社「東京新聞」H30.4.30)

自立促進と精神保健研究チーム

研究部長 金 憲経

- 「ひと工夫転びにくく」
(日本経済新聞社「日本経済新聞」H30.5.2)



もうすぐ七夕です。人工のイルミネーションが年々華やかになる一方で、空を眺めることをしなくなっているなあと感じます。変幻自在に変化し無限な色彩を放つ雲、夜になればその雲間から大小様々な星が輝く壮大な空間。その星たちが放った光は、人が誕生するはるか昔に発せられたものであり、まさに悠久の時の流れを経て私たちの目の中に映し出され、それを脳で感じているともいえます。それは、日々溢れる情報の処理に追われる脳に安らぎを与えてくれるかもしれません。私たちの意識が「上」という方角を忘れてしまいがちの今日、1年に一度くらい童心に帰ってゆっくりと首を上に向けてみませんか。脳にも、心にも、上に向かって、どこからともなく湧き上がる思いを感じることができるのではないのでしょうか。
(風にたなびく短冊)



平成30年7月発行

編集・発行：地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター 東京都健康長寿医療センター研究所編集委員会
〒173-0015 板橋区栄町35-2 Tel. 03-3964-3241 FAX.03-3579-4776

印刷：コロニー印刷

ホームページアドレス：http://www.tmghig.jp/J_TMIG/research/

無断複写・転載を禁ずる